

京都モデルフォレスト運動における 「企業参加の森林づくり」の現状と展望

村田 みゆき

キーワード：モデルフォレスト，企業参加の森林づくり，森林管理，里山保全，協働

1. 研究の背景と目的

わが国において森林は国土の67%を占めているが、高度経済成長や生活の変化とともに里山などに含まれる二次林や人工林の管理放棄が進んだ結果、森林が荒廃し深刻な状況を迎えている。それを受けて、1980年ごろから市民による森林ボランティア運動が活発に行われてきた。またCSR経営元年と言われる2003年ごろから、地域貢献活動の一環として森林整備に着手する企業が増加し、近年では41都道府県が企業と地域の仲介を行う「企業の森づくり」支援制度を有している。市民による森林ボランティアに関する研究は様々な視点から行われ限界や可能性なども明らかにされてきているが、始まって日の浅い企業の森林ボランティア活動に関する研究は依然として少ない。そこで本研究では、企業による森林整備活動の活動実態を明らかにし、課題や今後の可能性を検証することを目的とした。

2. 研究対象と調査方法

研究対象は、カナダで発祥したモデルフォレスト（多様な利害関係者の協働による持続可能な森林管理を目指すパートナーシップ）を基にした京都モデルフォレスト運動である。2006年に社団法人モデルフォレスト協会（以下、協会とする）が設立され、3年目の段階で府内29箇所、28企業・団体が活動を行っている。調査方法は、協会発行の「企業の森林づくり活動事例集」、協会・活動参加企業・団体のHPから活動実態について調査し、得られた情報を基に活動参加企業・団体を対象にアンケート調査を行い、回収結果を全体集計により分析した。主要な参加主体の活動への意向を把握するため、3活動地において行政、活動参加企業・団体、地域参加者を対象に自由回答方式の聞き取り調査を行った。

3. 結果と考察

企業参加の森林づくりにおける活動地は順調に増加しており、特に交通アクセスの良い京都府南部に多い。活動面積は20ha以下の活動地が5割、100ha以上の広大な活動地が2割弱存在した。活動頻度は年1~3回が多数を占めていたが、1回の参加人数が多いこともあり年間延参加人数は100人以上の活動地が半数近くであった。また5企業・団体がボランティアだけでなく森林づくり基金への寄付も行っており、労力と財政支援という2つの方法で森林づくりに取り組んでいた。活動の参加主体は、企業（社員と家族）・地域・行政が主となっており、他にはNPO・大学・他企業・一般市民などの参加も確認された。活動における取り組みの視点は、社会的にも問題意識の高い温暖化対策や景観整備、里地里山保全が多く見られた。森林づくり作業は除間伐・下草刈り・枝打ち・植林などが中心であり、レクリエーション作業では森林の様々な生態系サービスの利用や里山文化の保全としても意義がある作業も複数見られた。しかし活動頻度が低いことから、どちらの作業も断片的となっていると推測される。

活動地の増加と多様な主体の参画により、企業参加の森林づくりの活動の輪が広がっていることが確認された。しかし活動の詳細を追っていくと、活動地の以前の利用略歴を把握していないこと、断片的な作業内容、作業の意味や効果に関する参加者の理解不足、そして活動の検証過程やモニタリングの欠如などの課題があることが明らかとなった。これらの課題は活動内容をより充実したものへと発展させていくために重要である。そこで今後は作業の意味を体系的に学びながらの継続した作業としていくために、各活動地でコーディネーターや働きかけを行える人材の発掘と育成の機会を設けていく必要があると考えられる。